

上野の山のぶらぶら歩き

10月26日、秋晴れの温かな空に誘われて上野の美術館へ。

目標とする美術館は東京都美術館、日本バードカービング協会が主催する「全日本バードカービングコンクール」の展示会。知人が出展しているの、毎年鑑賞に出向いている。10月は美術展が数多く開催されるので、休日の混雑を避けて、毎年平日に出かけることにしている。

上野駅を公園口に下りると、平日にもかかわらず沢山の人が動いているし、中でも外国人が多いのには驚く。東京文化会館の北側に「安井誠一郎像」があるが、今や見向く人はいない。安井誠一郎という人のことを知らないの方が多くなってしまったに相違ない。国立西洋美術館のロダンの「地獄の門」と「考える人」も、今や人を集める存在ではなくなってしまったようだ。

芝生のある広場にはテントが張られてなにやらイベントをやっているようだったが、ごみごみしているので近づかないことにした。陶器のバーゲンセールをやっているテントに外国人が集まっている様子が見えた。

広場脇の木立の中には、夜をここで過ごす常駐の非公式住人の荷物が、ブルーシートで厳重にくるんで置いてある。その数たるや、驚くばかり。木立の中ではビニールシートを敷いて食事と団らんを楽しむ家族やペアが見えるが、この人達は夜になると非公式住人達の寝床になる場所であることは知らないようだ。

一旦国立博物館の前まで行ってから、戻って東京都美術館に入った。

美術館を出た後、今日は天気も良く爽やかなので、趣向を変えて鶯谷駅まで歩いて見ることにした。

●谷文晁碑 東京都美術館の裏側の木立の角に「文晁碑」がある。気がついている人は殆どいなかったが、江戸時代の画家谷文晁の記念碑である。谷文晁は宝暦13年(1763年)下谷に生まれて、下谷で育ち、天保11年(1841年)に他界した。まさに「この町の人」で松ヶ谷の源空寺にお墓がある。奇遇であるが、昨年他界した私の親友が同じ寺の墓地に埋葬された。文晁が描いた富士山は太宰治も絶賛した。

●正木記念館 東京芸大の敷地の裏角に、煉瓦作りの古くさい門柱が建っていたので中を覗いて見たら「東京芸大正木記念館」。芸大の前身である東京美術学校の五代目校長だった正木直彦氏の功労を記念して昭和10年に建てられた。

●博物館動物園駅跡 交差点の対角線の位置に、石造りの厳めしい建物が、シャッターを下ろして建っている。京成電鉄「博物館動物園駅」跡で、この地下に駅があった名残の建物。駅は1997年に廃業したが、2008年に東京都の「歴史的建造物」に指定され、保存の対象になっているらしい。建物の後は国立博物館の敷地で、法隆寺宝物館がある。国立博物館を右手に見ながら北東に向かう道を歩き始めたら電車の轟音が草むらの中の換気口から聞こえてきた。

●黒田記念館 道の左側に重厚な装いの建物が並んでいるので、ひとつずつ確認しながら歩いてみた。

国立博物館黒田記念館、我が国の近代洋画の父と言われた黒田清輝が「遺産の一部を美術の奨励に役立てたい」と遺言に残したことで、昭和3年にこの建物が建てられた。黒田清輝の遺作が鑑賞できる。

●文化財保護・芸術研究助成財団 昭和63年に文化財保護振興財団として誕生し、平成16年に芸術保護振興財団を吸収して現在の財団名になった。文字通りの機能を有する財団のようである。

●国会図書館子ども図書館 国会図書館の前身である「帝国図書館」ができたのは明治39年(1906年)。児童書専門の図書館としてスタートしたのは平成12年(2000年)。外国人の夫婦らしいペアが建物の中に入って行く後ろ姿が見えた。

●台東区立上野中学校 昭和22年開校の中学校で、当初は上野高校の敷地の中にあつたという。上野の山の北端にあり、おそらく昔は見晴しが良かったに違いない。この辺りは、桜の名所である上野の山になぞらえて上野桜木町と言った。

●寛永寺墓地 広大な寛永寺の墓地に突き当たり、否応なしに右に曲がり墓地の堀に沿って南東に向かう。右側は国立博物館の裏側で堀の隙間から裏庭を覗くことができる。左側はどこまでもどこまでも墓地。

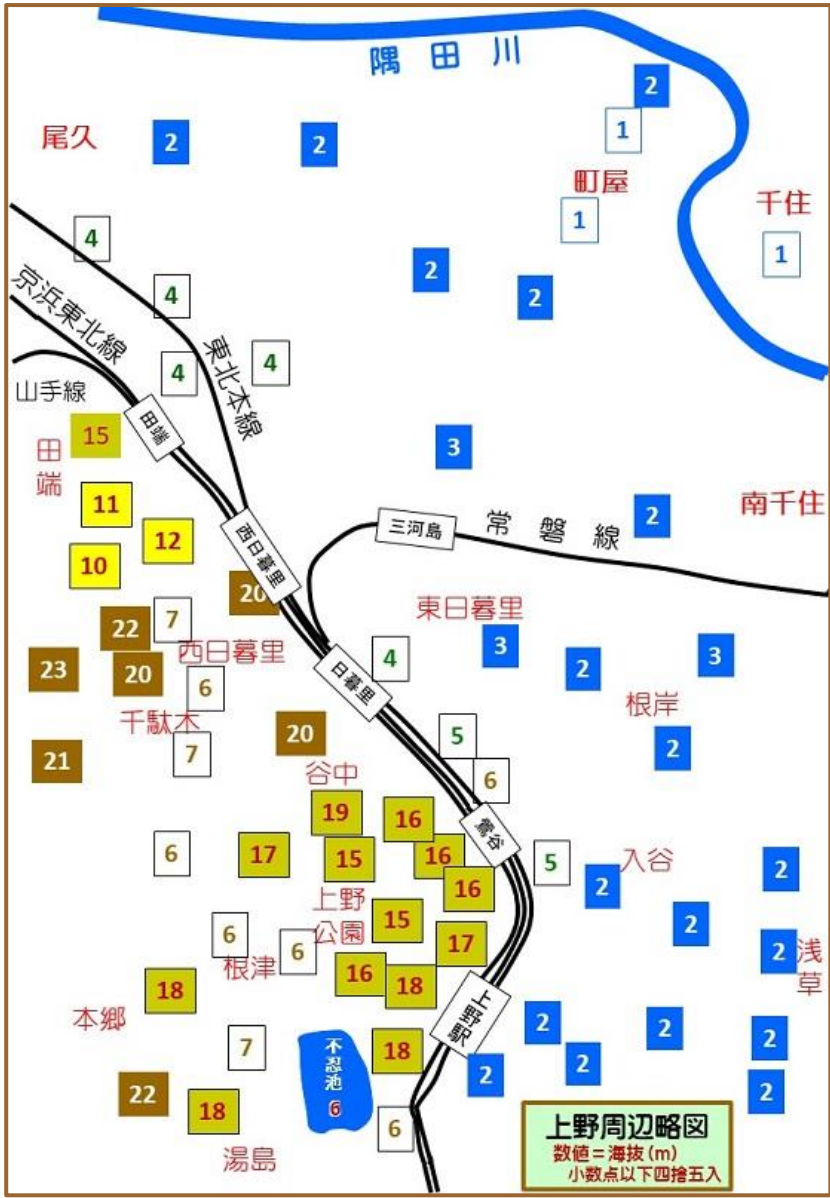
●台東区立忍岡中学校 これも昭和22年開校の中学校。上野中学校とは 400m弱しか離れていないが、少々近すぎないだろうか。学校の建物の上に突き出したように東京スカイツリーが見える。ここは海拔 16m、東京スカイツリーは約 3Km 先にあり、海拔 1m 弱の所に立つ 634mの塔。寛永寺墓地の前の道路から見ると、スカイツリーは高さの半分以上を学校の上に突き出している。

中学校前を左に曲がると、道は長く緩やかな下り坂になり、いつの間にか大きな跨線橋を渡って線路の東側の入谷に着地する。跨線橋の東側の線路際には昭和40年代を想起するような飲み屋街が雑然と並んでいる。

●鶯谷駅 跨線橋の西側(山側)崖っぷちにへばりつくように鶯谷駅が建っている。崖下の線路は海拔 5, 6mの高さで、そこから崖の上まで延びた鉄骨の台の上に駅舎が建っている。跨線橋から駅舎を眺めると、このあたりの地形がよくわかる。上野駅の公園口通路も同じように、海拔 17mの公園口から跨線橋を渡って、長い階段を下りて海拔 5mの入谷口へ下りられるようになっている。

この形は上野駅・鶯谷駅に限らず、王子駅あたりまで続いている。あらためて電車に乗って車窓の景色で確認するとよくわかるのだが、上野の山の山並みが飛鳥山までつながっている。

帰宅後に国土地理院の地形図で上野周辺の要所の高さ(海拔:m)を調べて、それを白地図上にプロットしてみた。上野の山の起伏が浮き上がってきて、山手線の内側と外側とで明らかに地形が異なることが再確認できた。山手線・京浜東北線などの旧国鉄の鉄道線路は、山の麓の海拔 4~5mほどの所を巻くように走っている。



鉄道よりも東側は海拔 2m程度の低地で、隅田川に向かって緩やかに傾斜している。西側は海拔 16~17mの山で、境界には 10m程の落差の崖がある。「山の手」と「下町」と言う言葉が地形の上でも確認できるし、さらに歴史を遡れば、古代にはここまで海が入って来ていたことも想像できる。

そして地形がわかってくると、地名もなるほど頷けてくるので面白い。「上野」は上の野原、「下谷」は下の谷、「入谷」は入り組んだ谷、「谷中」は谷の中、「根岸」は上野山の裾の沼地の岸などなど。

地図を描いている内に、何百年前、何千年前の景色までが想像できた。
以上

- ◆地図の見方
- [N] …海拔(m)
 - 小数点以下四捨五入
 - 無色(青字) … 1m
 - 青色(白字) … 2~3m
 - 無色(緑字) … 4~5m
 - 無色(茶字) … 6~7m
 - 黄色(赤字) … 10~19m
 - 茶色(白字) … 20m以上